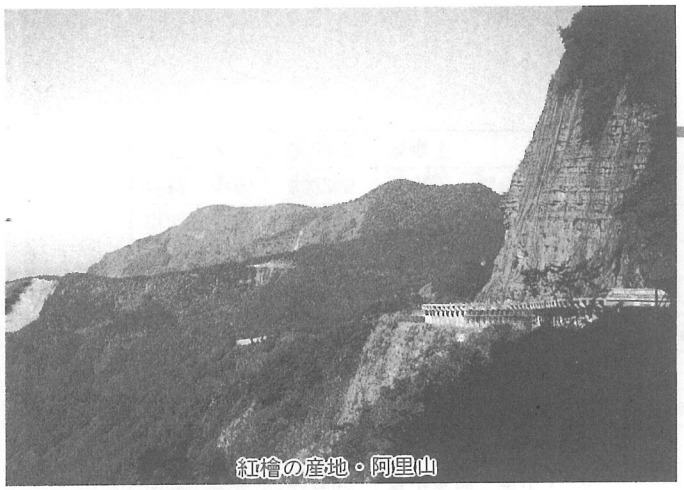
阿里山紀行


紅檜の産地・阿里山

8月9日、旅の2日目山武郡市森林組合横芝支部一行22名を乗せたバスは、一路台湾の山岳名所であり紅檜の産地として知られている阿里山へ。

車窓から眺める道路の両側は2期作目の稲が緑の条線を整然と見せている。その水田の所々に攪拌機が白い飛沫をあげている。養鰻池である。数がかなり多い。輸出用それも対象は日本である。我が国養鰻業の不振は此処にあった。土用丑には大分外貨を稼いだだろう。

バスは次第に山岳地帯に入って行き阿里山連峰の谷間をひた走る。午後4時頃霧が立ちこめて視界が非常に悪くなる。前方30メートル位いだろうか。雨が降りはじめる。南部山岳地帯はこの時期大変雨量が多いそうだ。日月潭より阿里山へ近道を通る関係で、道路は非常に悪く崖崩れが多く危険この上もない。それに、舗装されていない所もあり、車輪の半分近くまで水没する始末である。我が国なら即通行止めである。車優先人命軽視の政治姿勢を身を持って体験した。現在世界有数の外貨保有国であるにもかかわらず、国民受益事業が進まないのは軍事費の支出が国民総所得に対し支出割合が高いと思われる。

雨が止む。時々雲の切れ間があり、視界が開けると眼下に深い谷間。思わずはっと息を呑む。高度は海抜2000メートル位いか。熱帯から暖帯、そして温帯へと変化する樹木を見ながらバスは海抜2274メートルの終点阿里山駅に着く。マイクロバスに乗り替えて今日の宿阿里山閣に入る。

宿から眺める山容は房総の鹿野山九十九谷によく似ている。駅の裏側の山々は、杉の40年から50年位いの木が見事である。何故か檜が少ない。所々にある檜の大木はみな先が枯れていて寿命なのか無残な姿である。また、山中いたる所に直径2～3メートル位いの切り株が点在している。戦前の乱伐の跡か。明治神宮の大鳥居もここから運んで造ったと聞いている。

翌朝起床3時40分いよいよ御来光である。空は満天の星明かりである。阿里山鉄道駅は、人で混雑を極め到着する汽車は超満員である。御来光の場所である祝山(海抜2400メートル)で下車。徒歩で休憩所迎日楼までゆく。ここから玉山の日の出、雲海の眺めば最適という。宿よりジャンパーを借りた人は良いがとにかく寒い。日の出前なので、玉山は薄明かりの空の中に灰色の山肌がくっきり浮かんでいて、素晴らしい絵の様な美しさである。雲一つ無い稜線の一角から真赤な太陽が昇り始める。神秘な何とも形容し難い光景である。約2～3分で峰から離れる。早暁の起床はつらいが価値は十分あると思う。

祝山より森林鉄道で帰る途中、左右の山は山武杉にも優る杉檜の美林が続く。行きは朝早いので暗くて見ることが出来なかった。ちょうど海抜が温帯に加え、雨量の多いことが一層成育を良くしていると思われる。そのためか樹肌が黒ずんでいる。山武地方でも地味が良い所は成長も早く樹肌が黒ずんでいる。満員の汽車は暗く天井の電燈も所々であとは壊れているらしい。誰かが手で叩いたらパッとついた。みな大笑いする。接触不良だったらしい。

朝食を済ませバスは一気に下山する。下りは正規の立派な登山道でセンターラインもきれいであった。昨日とは全然違い快適そのものである。竹林の多いのが次第に目につくようになる。熱帯に近づくにつれて車窓からの眺めが急速に変わる。平地はもとより、山の斜面のいたる所に檳榔樹やマンゴー、ザボンが見え景観は熱帯植物に変わる。

バスは台南市に入る。市街、街角いたる所に檳榔(ビンロウ)の看板が目につく。この檳榔とは檳榔樹の実のことで、椰子の一種で実を口に入れて噛むと非常に良い気持ちだそうだ。また、胃腸病その他にも効果があると聞く。台湾の人々の多くが好み口の中を赤くしている人を見かける。軽い中毒になり止められなくなるそうである。車窓から見る外は平凡な田園風景が続き快適なバスの旅である。朝早いので眠い。……バスは一路台湾最南端高尾を目指しひた走りに走る。

(山武郡市森林組合横芝支部　怒賀源也)